

令和元年度学生の海外派遣の成果報告

外国語学部東アジア学科韓国海外研修

派遣先	韓国
派遣期間	令和元年 8 月 1 日～8 月 23 日
目的	<p>授業科目である。韓国語を読み、書き、聞き、話す能力を身につけるためには、本学での語学科目の履修に加えて、現地に一定期間滞在し実践的能力を向上させることが有効である。また、現地で韓国の社会・文化に直接触れることは、韓国語能力の向上だけでなく、韓国・朝鮮に対する理解をさらに深めることにもつながる。こうしたことから韓国海外研修は、東アジア学科において極めて重要な意義を有している。</p> <p>外国語学部東アジア学科のカリキュラム・ポリシーの基本は、東アジアの国家や地域について、その国家や地域の言語の修得を基礎として、その文化や社会、経済、政治など幅広い分野について専門的な学びを積み上げ、隣国とより良い関係を築くことが可能な、国際的に活躍ができる韓国語人材を育成することにある。このような目的を達成するため、東アジア学科のカリキュラムは、(1)韓国語の運用能力の育成、(2)東アジアの歴史と文化に関する知識の修得、(3)異文化摩擦等による問題を解決する能力を育成、という三つを基本に据えて構成されている。なかでも「韓国海外研修」は、現地（韓国）での語学研修のみならず、幅広い現地体験を積むために設置されているプログラムであり、修了者には 4 単位が付与される選択必修科目である。東アジア学科が目指す人材を育成するため、カリキュラムに設置されている科目のなかにおいても、最も重要な意義を有するものである。</p>
教育研究活動	<p>(韓国)</p> <p>梨花女子大学校</p> <p>計画通り派遣前の春学期に危機管理セミナーも含めておおむね週 1 回 (90 分間) の「事前指導」を実施した。韓国海外研修に関しては、専任教員 2 名が「ソウルの都市構造・歴史遺産」などの講義やフィールドワーク計画の立案などを行い、単なる語学研修のみにとどまらず現地社会への理解が一層進むよう学習指導を実施した。続く 8 月の現地語学研修では、参加学生は各派遣先大</p>

	<p>学の研修カリキュラムにしたがって語学運用能力の向上に取り組むとともに、各種の文化体験授業や現地学生との交流活動などに積極的に参加した。3週間あまりにおよぶ現地滞在の中で、参加学生は日本との違いを肌で感じ、時には生活習慣や食事などの面で不便を感じることもあったが、最終試験を経て無事にすべての現地研修を終えることができた。</p> <p>派遣先大学は、参加学生に対して現地学生を語学学習のチューターとして手配している。チューターは語学学習の補助はもちろんのこと、所定のカリキュラム以外の時間にも現地の歴史的遺産などの訪問に同行するなど、参加学生にとって活発な国際交流を体験することにつながった。こうした国際交流の経験は、今後本学東アジア学科で国際理解の基礎を修得していく上で貴重な機会となったと考えられる。</p>
--	---

令和元年 12 月現在

令和元年度学生の海外派遣の成果報告

外国語学部東アジア学科中国海外研修

派遣先	台湾
派遣期間	令和元年 8 月 4 日～8 月 24 日
目的	<p>授業科目である。台湾の大学において 3 週間およそ 80 時間の授業を受講する。中国語の実践的な語学力の向上を図り、異文化理解を深める。</p> <p>外国語学部東アジア学科のカリキュラム・ポリシーの基本は、東アジアの国家や地域について、その国家や地域の言語の修得を基礎として、その文化や社会、経済、政治など幅広い分野について専門的な学びを積み上げ、隣国とより良い関係を築くことが可能な、国際的に活躍ができる中国語人材を育成することにある。このような目的を達成するため、東アジア学科のカリキュラムは、(1)中国語の運用能力の育成、(2)東アジアの歴史と文化に関する知識の修得、(3)異文化摩擦等による問題を解決する能力を育成、という三つを基本に据えて構成されている。なかでも「中国海外研修」は、現地（台湾）での語学研修のみならず、幅広い現地体験を積むために設置されているプログラムであり、修了者には 4 単位が付与される選択必修科目である。東アジア学科が目指す人材を育成するため、カリキュラムに設置されている科目のなかにおいても、最も重要な意義を有するものである。</p>
教育研究活動	<p>(台湾)</p> <p>国立台湾師範大学</p> <p>計画通り派遣前の春学期に危機管理セミナーも含めておおむね週 1 回（90 分間）の「事前指導」を実施した。中国海外研修（台湾）に関しては、中国コース専任教員 4 名が「台湾の地理と社会・文化・歴史」「生活会話」「生活安全指導」などの講義をリレー形式で実施した。続く 8 月の現地語学研修では、参加学生は各派遣先大学の研修カリキュラムにしたがって語学運用能力の向上に取り組むとともに、各種の文化体験授業や現地学生との交流活動などに積極的に参加した。3 週間あまりにおよぶ現地滞在中で、参加学生は日本との違いを肌で感じ、時には生活習慣や食事などの面で不便を感じるこ</p>

	<p>もあったが、最終試験を経て無事にすべての現地研修を終えることができた。</p> <p>派遣先大学は、参加学生に対して現地学生を語学学習のチューターとして手配している。チューターは語学学習の補助はもちろんのこと、所定のカリキュラム以外の時間にも現地の歴史的遺産などの訪問に同行するなど、参加学生にとって活発な国際交流を体験することにつながった。こうした国際交流の経験は、今後本学東アジア学科で国際理解の基礎を修得していく上で貴重な機会となったと考えられる。</p>
--	--

令和元年 12 月現在